「私だから、の時代」に私にできること

佐世保北中学校一年　溝越　理彩

「食事を作るのは女性87%。」という見出しが目に留まりました。8月12日の新聞で「食と日本社会」を巡る世論調査の「家で食事を作る人の性別」の問いに、女性67%、どちらかといえば女性20%を合わせて87%、男性は合わせても12%でした。「性別役割の意識改革や家事労働のあり方を問い直す議論が進む中、依然として炊事の役割が女割が女性に偏る実態が浮かび上がった」と書かれていました。私は、87%が女性という割合の大きさに驚きました。

私の家族は両親と私の三人で、都合のつく人や得意な人が担える役割をしています。父は料理が得意ですし、洗濯も掃除もします。母の方が家事の割合は少ないです。私が赤ん坊の時にミルクやオシメの世話をしたのは両親で、保育園も交代で迎えに、小学校行事も都合のつく方が来ていました。両親は忙しい

ので、私も幼い頃から自分でバスで移動したり、夏休みのお昼の準備などできることをしてきました。私は家の中で性別での役割を意識したことがありません。

母に祖父母の若い頃のことを尋ねると、共働きだったが、家事など家のことは祖母だけがしていたそうです。子どもだった母は、女の人は外で仕事をして、家に帰ると、家事や子育てもして、とてもたいへんだと思っていたそうです。

私は小学6年の時に、学校の人権平和委員会の委員長をしました。戦争や平和、学校生活での課題などを、みんなで考え、平和集会や挨拶運動などの活動をしました。今も戦争があったことで苦しんでいる人々、また、世界には、教育を受ける機会もなく、飢えに苦しむ子ども達や生きることに精一杯の人々がたくさんいることを知りました。その時に男女を分けて考えたりはしませんでした。中学生になってからも、男女での個定的役割分担

意識や差別・偏見は、私の周りや学校で感じるようなことはありません。

佐世保市のホームページには「男女共同参画社会は、性別にかかわらず、一人ひとりが尊重され、それぞれの個性や能力を発揮し、ともに輝くことができる社会のこと」とあります。私たちが大人になるころには「男女共同参画」という言葉を使わなくてもよい世の中になってほしいと思います。

今、中学生の私たちにできることは、性別ではなく、人間として何が大切かを考えることだと思います。誰もが優しさや思いやり、互いに理解し、助け合うという気持ちを持つことで、いろいろな問題が解決していくのだと思います。

まずはそういう気持ちを持って友達や周りの人たちに接していきたいと思います。これが未来に向けて、今、私にできることです。